

L'ORCHESTRE DU DIMANCHE 団内報
休日通信
 第10回 - 4号 BD-99-RC10-04

♩ ツインバロン

今回、コダーイの組曲『ハーリ・ヤーノシュ』の第3曲および第5曲でフィーチャされる、ハンガリーの民族楽器、ツインバロンを弾いていただく、中川 陽子さんを御紹介します。

また、ツインバロンという楽器についても、その簡単な紹介文を中川さんより寄せていただきましたので、掲載します。

< 中川 陽子 さん >

桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学ピアノ科卒業。

1991年 ハンガリーに留学。コダーイメソードに基づく音楽教育及び、ピアノ指導法を学ぶかたわら、現代ツインバロン奏者の第一人者であるファービアン・マルタのもとでツインバロンを習い始める。

1993年 セント・イシュトバーン音楽院ツインバロン科に編入し、ハンガリー政府 給費生となる。

1994年 第1回ブダペスト・ツインバロンフェスティバルに参加、特別賞受賞。帰国後、新日フィル、京響、東京シティフィルその他のオーケストラと共演。

(千葉管弦楽団、宇都宮大学管弦楽団にも客演)

< ツインバロンとは >

ハンガリーの代表的な民族楽器ツインバロンは、その起源をアジアに持つとされ、その音色もどこか東洋的です。

ペルシャの宮廷音楽を演奏するにあたって最も重要な楽器とされている「サントゥール」というイランの民族楽器が、ツインバロンの原型であると考えられていますが、中国の少数民族やモンゴルの遊牧民の間にも、ツインバロンにとてもよく似た楽器が 現在でも残っています。

ツインバロンは、台形の木箱(重さは約100 kg)に、金属の弦が全部で123本、横に張られています。音域は4オクターヴあり、細いパチで弦を打ち鳴らして演奏します。

金属の弦を打ち鳴らすという点では、ピアノの遠い親戚ともいえるでしょう。

ツインバロンは、ハンガリー民謡や民族ダンスの伴奏に用いられる民族楽器のひとつですが、今回のようにオーケストラと共演するという珍しい「ハーリ・ヤーノシュ 組曲」の中では、ハンガリー・ジブシーの華やかな演奏スタイルも取り入れられています。

(文：中川 陽子さん)



上図は、今回使用する、中川さんのツインバロンと同型のものです。

♩ よりよい演奏のためのヒント

みなさんこんにちは。コントラバスの吉田です。今回は、私がいままでいろいろアマチュアオーケストラで演奏したり、演奏会を聴いたりした 経験を元に、「いい演奏」の為にヒントに 出来そうな事を書いてみたいと思います。

1)「指揮者を見よう」 楽譜にかじりついていませんか? 「オケの基本です」、っていうのはわかってるんだけど、現実には指揮者を見るのを怠りがちです(自分もその一人)。特に、曲には「決めどころ」っていうのが必ずあるのでそこでは絶対指揮をみましょう。(広報註：眼鏡マークですね!)

2)「他のパートの演奏を聴こう」 聴いてるよ。っていわれそうですが、果たして本当に他のパートを聴いて演奏していますか? 特に練習の時は、自分の楽譜を弾くことに神経が いってしまうので、他のパートの音って注意して聴いて いないと思います。お互い聴き合って弾いていけば 変なところ ずれたりすることはなくなりますよね。

3)「お客様に聴かせる」 何の為に演奏会を開くのか? お客様に自分達の演奏を聴いていただくためですね? 「楽譜を弾く」ことだけが目的ではありません。「音楽を聴かせる」ことが目的です。たとえ、技術的にうまいオケでも、「楽譜を弾く」ことが目的になっていると、とてもつまらない演奏になります。ダイヤモンドは「音楽を聴かせる」団体 になりたいですね。

(コントラバス・(人事担当)・吉田)

♩ 予算案承認について

重要事項なので、毎号掲載です。

1. 予算案

今回の参加費金は、
 一般：¥32,000-
 学生：¥22,000-

となります。皆さんの承認後、正式決定となります。予算案承認は6月12日の練習にて予定しています。

詳細の予算案は、別途資料を参照して下さい。

また、予算案に対して異義のある方や疑問点などは、会計担当 金井(FI)まで。

(広報註：前号では学生¥20,000 となっていました但誤りでした。すいません)

2. 支払い期限

参加費の前納ぶん ¥10,000
 6月12日(土)まで
 残額(¥22,000、学生¥12,000)
 7月17日(土)まで
 一括で全額お支払いいただいてもOKです

3. 支払い方法

以下の2通りの支払い方法があります。

- 現金での支払い：会計担当 金井(FI)に、練習時に現金で支払って下さい。
- 銀行振り込み：下記口座へ振り込んで下さい。振り込み手数料は申し訳ないですが自己負担でお願いします。

(会計：金井)

さくら銀行 麹町支店 普通 7196197
 オーケストラ・ダイヤモンド

♩ ハーリ・ヤーノシュの物語

コダーイの組曲『ハーリ・ヤーノシュ』は、もともと歌芝居(Singspiele『魔笛』と同じです。いってみればミュージカルですね)として作曲され、好評を博したことから、後に自身が管弦楽としての聴き所を抜粋し組曲としたものです(ちなみに、この組曲編纂を勤めたのは盟友バルトークだとか)。

ハーリ・ヤーノシュとは、19世紀のハンガリーの詩人ガライ・ヤーノシュ作の叙事詩の主人公となっている伝説上の人物で、ドイツのミュンヒハウゼン男爵(いわゆる「ほらふき男爵」)とよく対置される、ハンガリーでは最もよく知られる昔話の主人公といえましょう。コダーイは、ハーリを単なるほら吹き爺さんとしてではなく、根っからの農民(即ちマジャール民族の代表)であり、美しい夢を語る詩人として捉えています(詳しくはスコア序文をお読み下さい)。

毎日、村の居酒屋でワインを空け乍ら、若かりし頃の武勇伝に花を咲かせる老ハーリの姿から、劇は始まります。

プロローグ：ナジャボニイ村の居酒屋

全管弦楽による「くしゃみ(第1曲)」で始るとハーリ爺さんの登場です。ハンガリーでは聞いている時にくしゃみをするとその話は本当だという言い伝えがありますが、はてさて、ハーリ爺さんの話は本当なのか……

第一の冒険：ハンガリーとロシアの国境

オーストリア皇女でナポレオンの后マリア=レイザ姫がハンガリーとロシアの国境で足止めされているのを見兼ねたハーリは、ロシア兵の詰め所をハンガリー領地に引っ張ってきてしまいます。姫に気に入られたハーリはそのお供としてウィーンへ行くこととなります。ウィーンへ旅立つハーリとその恋人エルジェは、故郷を想う歌を歌います(第3曲)。

そして場面転換に、古い民族舞踊に基づく間奏曲(第5曲)が演奏され、第2の冒険へと続きます。

第2の冒険：ウィーンへの帰還

姫の騎士エベラスティンはハーリの出世を妬み、荒馬に乗せて失敗させようとはしますが、ハーリは見事に乗りこなし、姫だけでなく皇后も大喜び。皇后との接見の時、丁度大きなからくり時計が12時を報せませす(第2曲。ちなみにスコアを見るとタムタム(銅鑼)はちゃんと12回鳴ってます!)

エベラスティンはかわりにエルジェに手を出そうとはしますが相手にされず、怒ってナポレオンに親書を出してフランスとオーストリアの間に戦争を起こさせます。そこでハーリは大尉となってナポレオンを迎え撃つべく出征します。

第3の冒険：戦場

オーストリア軍の兵士たちを後目に、ハーリはたった一人でフランス軍の総攻撃をけ散らし大活躍。ナポレオンとの直接対決(タイマン張ったわけですね)も、ハーリの勇姿を見るや怖じ気付いて命ごい(第4曲)。ナポレオンはハーリを将軍に取り立てて、自身は逃げ帰ります。

第4の冒険：ウィーンの宮廷

ハーリはというと、情けないナポレオンに愛想をつかして今やハーリにぞっこんの姫と恋人エルジェの板挟みで嬉しい悲鳴。

そこへ皇帝が宮臣を引き連れて登場(第6曲)。上機嫌の皇帝は、姫と結婚させ領土の半分を分け与えようとはしますが、ハーリは褒美を貰うのなら、恋人エルジェと共に故郷へ帰って欲しいと願い出て、村へ帰ってきます。

エピローグ：再びナジャボニイ村の居酒屋

マジャール民族の誇りが合唱で歌われる(第3曲と第5曲に基づく名曲です)と、舞台はワインもすっかり空になった居酒屋、皆はハーリの話を用意しているんだかどうか。

「わしの話を実証してくれるのはもう誰もおらんなあ」

「いや、ハーリ爺さんは偉大だよ。証拠なんかなくたって信じるよ」

Viola

Ti - szán in - nen, Du - nán túl, Túl a Ti - szán,
van egy csi - kós nyá - ja - stul. Kis pej lo - va ki van köt - ve,
Szür - kö - té - llel, pok - róc nél - kül, ga - zda - stul.

♩ 第3曲の「歌」

第3曲の「歌」は、第一部の終わりでハーリと恋人エルジェのデュエットで歌われます。これはハンガリー古謡ほぼそのままだそうです。その歌詞を……(邦訳：わし)

HÁRY

Tiszán innen, Dunán túl
Túl a Tiszán, van egy csikós nyájastul.
kis pej lova ki van kötve,
Szürkötéllal, pokróc nélkül, gazdástul.

(ハーリ)

こちらがティサ、あちらはドナウ
ティサのあちらに、馬子が群れを引き連れて
彼の小さな栗毛はフェルトの縄で繋がれて
敷布はないが
御主人様とともに

ÖRZSE

Tiszán innen, Dunán túl
Túl a Tiszán, van egy gulyás nyájastul.
Legelteti a gulyáját,
Oda várja a babáját byepágyra.

(エルジェ)

こちらがティサ、あちらはドナウ
ティサのあちらに、牛飼いが群れを引き連れて
彼の群れには草を食ませ
そして愛しい人を待つ
草の寝床の上で

HÁRY

Tiszán innen, Dunán túl
Túl a Tiszán, van egy juhász nyájastul.
Ott főzik a jó paprikást,
Meg is eszik kis vellával, fakanállal,
Bográcsbül.

(ハーリ)

こちらがティサ、あちらはドナウ
ティサのあちらに、羊飼いが群れを引き連れて
そこではパブリカのシチューを作り
食べるのは小さなフォークと
木のスプーンでシチューの鍋から

HÁRY,ÖRZSE

Tiszán innen, Dunán túl
Túl a Tiszán kicsi gunyhó nyájastul.
Mindig azon jár az eszem,
Oda vágyik az én szivem párostul.

(ハーリ、エルジェ)

こちらがティサ、あちらはドナウ
ティサのあちらに、ポプラのそばの小さな小屋
私の想いはいつでもそこに
私の心は憧れている
あなたと二人でいることを

註：ティサ … ハンガリーの東側を南北に流れる川。上流には貴腐ワインで有名なトカイ、中流にはコダーイの故郷ケチケメートがある。ドナウとティサに挟まれたハンガリー中央部は平原。(いつてみたい!!)

13 独断と偏見のDISK紹介 (コダーイ編)

広報担当の独断と偏見に満ちたDISK紹介です。「CD 持って無いから欲しいんだけど、何を買えばいいのかわからない」という方の参考になりますでしょうか……?!

ちなみに、ここで御紹介する輸入盤の殆どは国内盤でも出ています。また、御紹介したものは全て**広報所有**ですので、試聴希望の方はどうぞお申し出ください。

ジョージ・セル/クリーヴランド管弦楽団、ツィンパロン独奏：トニー・コヴェス=シュタイナー
1969 録音 [CBS] SBK 48162 (輪)

この作品の名盤として知られるが、とにかくセルが熱い! マジャール魂炸裂&オケめっちゃ巧! 「音楽時計」の精緻さ、「歌」での魂のこもった各ソロの歌い方、情熱溢れる「間奏曲」、最後3小節の大見得、そして何より金管のサウンド、どれをとっても文句のつけようがない。冷徹なイメージのセルも、ここではまぎれもなくマジャール人であることが感じられる。特選といえよう。併録はLPと同様、これまた名演のプロコフィエフ『キージェ中尉』と、この輸入廉価盤では『展覧会の絵』(国内盤では『だったん人』他になっている)。思えば、この演奏は、当時中学生のわしが自分のお小遣いで2番目に買ったLPだった(ちなみに最初は同じコンビでバルトーク『オケコン』/ヤナーチェク『シンフォニエッタ』。なんちゅう中学生や(^^))。国内盤再発のCDではジャケットがそのLPと同じイラストで、微笑ましい。

ゲオルク・ショルティ/シカゴ交響楽団、ツィンパロン独奏：ローレンス・キャプテン
1993 録音 [DECCA] 443 444-2 (輪)

“ハンガリアン・コネクション”と題されたアルバムで、同様コンセプトのプログラムでのウィーンフィルとのライヴLDも出ている(後述参照)が、これはシカゴでのライヴ。オケがとにかく巧い! 他の演奏では聴き取れないパートも明瞭に聞こえるのは、さすがショルティ&シカゴ。なにせ、金管のアコードの音塊は圧倒的。「間奏曲」もシカゴの弦楽器が特筆もの。ただし、ツィンパロンのバランスが弱いのが残念。ショルティという「スコアを見ながら聴くのに最適」という印象があるが、さすがにお国の作曲家の作品(しかもリスト音楽院時代の師)となると魂の入り方が違う。パストロ&チューバの表現にも納得。なお、ショルティとコダーイの関係については、最近邦訳が刊行された『ショルティ自伝』に興味深いエピソードが出ている。一読をお薦めする。

併録は、バルトーク、ヴェイネル(どちらもショルティの師)、リストなど。リストの『ハンガリー狂詩曲』なんて、こんな機会でもなければ絶対買わなかったな…(^^)。

クルト・マズア/ニューヨーク・フィルハーモニック、ツィンパロン独ミロン・ロマンル
1992 録音 [TELDEC] 9031-77547-2 (輪)

金管のサウンドのみを期待して聴いてみたが、いい意味で裏切られた。コダーイとはあまり馴染みのないコンビと思いきや、これがなかなかの名演。「歌」のメロディの歌わせ方は、セル、ショルティらと同様、ハンガリー民謡のリズム感がよく出ていて、とりわけホルン(多分、メイヤース?)の気合じゅうぶん。金管のサウンドは当然ながら抜群(Tbアレッシが吹きまくり!)。ただ、全体的にタイコをはじめとして低音域バランスが弱く、やや腰高な印象を受けるが、これはTELDECの録音の特徴のようだ。

ほかに『劇場序曲』(あまり録音がないので、貴重)、リストの『マゼッパ』『メフィスト・ワルツ』を併録。

フェレンツ・フリッチャイ/ベルリン放送交響楽団、ツィンパロン独奏：ジョン・リーチ
1961 録音 [DG] 457 745-2 (輪)

ちょっと古い音源だが、演奏はととてもよい。フリッチャイは他にRIAS放送響とのモノラル録音もあるが、これは2度目の、ステレオ録音。他資料によればコダーイ監修らしい(ライナーには何も書かれていないが)、大時代的な表現が作品のユーモラスな側面によくマッチ。「ナポレオン~」でのトロンボーンのものとも間抜けな風情が最高!(これ、誉め言葉です)。サクソも大袈裟にオペラチックかつコミカルで爆笑必須。「間奏曲」もなかなかいいフェルマータを聴かせてくれる。終曲最後の犬見得は、吹奏楽関係者にはウケるでしょう(わしも好き)。同じコンビでの『マロシュセーク舞曲』『ガラタ舞曲』、RIAS放送交響楽団&合唱団との『ハンガリー詩編』を併録(いずれもモノラル)。こちらも名演。カップリング違いでも出ている。

ちなみにこのCDは<THE ORIGINALS>という、最新デジタル技術でリマスターした復刻版シリーズだが、CDのレーベル面の印刷がLPレコードの盤面みたいで、雰囲気よし。

シャルル・デュトワ/モントリオール交響楽団、ツィンパロン独奏：ジェームス・アール・バーンス
1994 録音 [DECCA] 444 322-2 (輪)

フランス音楽に強いこのコンビ、想像通り、民族色はそれほど感じさせないが、オケの巧さと録音のよさで、御伽噺の世界をよく表出。クリアな音、明快なリズム。「歌」の各ソロは十分に謡い込んだ結果としての民謡調。間奏曲が若干さくさく進みすぎなのが残念。全体的にもう一息、やっちゃって来てほしいかなと思うが。こういう演奏を聴くと、この作品は、マジャール魂炸裂モードでもよいし、オケの巧さで聴かせてもよいものであることがよくわかる。

併録が『孔雀』『ガラタ舞曲』『マロシュセーク舞曲』と、コダーイ名作集(=よくあるカップリング)なので、録音のよいコダーイを求める方にはお勧め。ちなみに国内盤は絵本仕様。

アントル・ドラティ/フィルハーモニア・フンガリカ、ツィンパロン独奏：ジョン・リーチ
1973 録音 [DECCA] 425 034-2 (輪)

これもまた豪快にやってくれる。緻密なアンサンブルではないが、情熱的かつ派手。ショルティと同門のドラティは晩年、デトロイト響と多くの名演を残している(残念ながらコダーイは再録なし)が、この盤でもいかにもといった感じ。デュトワ盤とは全く対照的といえよう。最後のバスドラは大変偉い!。併録はデュトワ盤と同様、コダーイ名曲集。なお、2枚組みでコダーイ管弦楽曲集になっている盤も出ている(『交響曲』や(コダーイの)『管弦楽の協奏曲』なども含まれており、貴重!)

番外編：歌芝居『ハリー・ヤーノシュ』
イシュトヴァーン・ケルテス/ロンドン交響楽団 ほか
1968 録音 [DECCA] 443 488-2 (輪)

組曲のもとになった歌芝居(ジグシュピール: Singspiel)の全曲盤。オケは英国オケであるものの、指揮者のケルテスほか、独唱者はハンガリー陣営で固めたもので、民族的な色彩豊かな演奏。俳優のピーター・ユスティノフがナレーション他、台詞部分を一人何役もやっている。2枚組みの後半には変奏曲『孔雀』、『ハンガリー詩編』などを併録。このコンビは組曲としても出ている。

随所に現れる民族的なリズム処理には納得。歌以外の語り部分は英語(雰囲気を出す為に無茶苦茶訛ってる)なので、話の筋も聞き取りやすい。組曲に含まれているナンバーはほぼ前半3幕に含まれるので、CDの一枚めを聴けばすむのだが、それでは全曲の魅力の半分にも満たない。何といってもフィナーレが感動もの! 組曲の第3曲「歌」のメロディがいきなりトゥッティで響き渡り、合唱によって2度づつ上に重なっていく導入、金管の厚い(=熱い)アコードで響き渡るところ、間奏曲(組曲の第5曲)が戻ってくる後半(もう、ここ最高!) 等等、マジャールの魂を感じ、胸を熱くすべし。必聴!!

